

## 意識と言語

人間科学研究科科学哲学研究室

M1 右田晃一、M2 池田健人

わたしたちはみな、それぞれ自身には意識があるということを信じている。しかし、そのとき人はいったい何を根拠にそのことを主張しうるのだろうか。意識とは何か。これは、意識研究においてもっとも魅惑的な問いのひとつであろう。しかし、それは意識研究においてもっとも回答の困難な問題でもまたある。それゆえ、意識とは何かという問いは、最初から相手にするにはあまりにも大きすぎる。

そこで、今回のワークショップでは、意識とは何かということを明らかにするための一局面として、「意識的言語」の存在に主題を絞ってこのことについて論じよう。「意識的言語」とは、意識として存在しているような言語のことである。もしそのような言語が存在するのなら、意識は物理的言語によって十分に表現することができるだろう。しかし、そのようなことは本当に可能なのだろうか。

発表の構成はつぎの通りである。まず、池田によって言語は世界3に存在するということが主張され、そのことによって「意識的言語」の存在が示唆される（本論1）。それに対して、右田は無意識までも含めた観点から、言語活動の成立過程に注目することによって「意識的言語」について考察し、その存在を一応は認める。しかし、それは部分的なものであるどころか、物理的言語へ完全に翻訳しうるようなものでもないため、わたしたちが意識を物理的言語によって十分に表現することはできないと主張する（本論2）。

### 【本論1：池田】

その晩年、ポパー（Karl R. Popper, 1902–1994）は三世界論と呼ばれる存在論を提案した。これは、わたしたちの生きるこの宇宙を3つの部分領域（物理世界、意識世界、思考内容の世界）に区別し、それらのあいだには相互作用があると考えられる理論である。この理論において、言語の存在論的地位は非常に重要である。なぜなら、それは思考内容の世界（世界3）の発現に大きくかかわっているからである。それゆえ、本発表では言語の存在論的地位に関連して、言語は世界3に属する存在者であるということを明らかにする。

しかし、三世界論によれば、言語は意識世界（世界2）にもまた属する存在者である。すなわち、「意識的言語」は存在する。そうすると、意識を物理的言語によって十分に表現することは可能であるようにみえる。だが、本発表では「意識的言語」の存在は示唆されるのみである。「意識的言語」の存在、そして物理的言語による意識の十分な表現可能性については、いったいどのように考えればよいのだろうか。本論2では、このことについて論じる。

## 【本論2：右田】

近年、心理学及び認知科学において無意識に関する知見が増大している。それらによれば、人間の認知過程や行動は、私たちが考えるよりも意識的でなく無意識的であることが主張されている。そして、それらは人間の意図的介入が困難な自動性という概念をも含み、思考という事象もまた例外ではない。

意識と思考という文脈でいえば、ジェームズ (William James, 1842–1910) による「意識の流れ」、すなわち、'The Stream of Thought' (James 1918: 239) の標語は有名である。しかし、ここで注意しなければならないのが、元々これは「意識(Consciousness)」ではなく「思考 (Thought)」であるということである。そして、私たちが日常考える「思考」というものは言語でなされるということが想定されている。そこでは、思考内の言語は意識的の産物、つまり「意識的言語」として描かれ、それが物理的言語に翻訳されて表現されるように思われる。しかしながら、「意識的言語」というものの存在を仮定しなければ言語活動は成り立たないのだろうか。つまり、本論冒頭の考え方からすれば、そもそも思考や言語活動は十分に意識的である必要があるのか(i.e., 無意識的でありうるのか)という問いが浮かび上がってくる。更に言えば、思考そのものが言語的形態をとる必然性があるのか(i.e., 言語的でない思考はありうるのか)という問いさえ浮かび上がる。

科学的知見からこれらの問いに答えようとすれば、意識的言語は必要ではないどころか、知覚・思考対象の内容のほとんどが無意識的・自動的に処理され、意識的な過程を経ることもなく、実際の叙述や発話、物理的言語をもたらしているということもできるのではないだろうか。勿論、無意識的な(正確に言えば前意識的な)内容を意識化すること—意識的言語の存在を認めること—は注意という能動的過程を経由することで部分的には出来るだろう。また、対象に注意を向け続けることで意識的言語によって対象の内容を思考することは部分的には出来よう。だが、そこでは注意という過程を経由しているため本来の内容を意識的言語で正確に表現することは出来ず、また意識的言語を物理的言語に翻訳する時ですら注意という過程を経るために完全な翻訳は不可能である。更に、そうして経由された物理的言語は再帰的にでしか意識を捉えることが出来ないため、意識を十全に表現できるとは考えづらいと思われる。